



高橋教授の

# この人に 会いたい

Vol.91

ゲスト

# 内山 量史

氏 一般社団法人 日本語聴覚士協会会長

2000年に発足し、現在では所属会員数2万2100人超に成長した一般社団法人日本語聴覚士協会。24年5月、同協会のトップに就任した内山量史会長は言語聴覚士（ST）の国家資格化前から30年以上にわたり、現場の最前線で臨床にあたってきた。求められる役割が多様化するなか、言語聴覚士の現状と課題、将来のあるべき姿、次代を担う若手への期待などを語り合った。

## 「日々向き合った患者さんが教科書」 STの醍醐味を知った駆け出し時代

### 野球部のチームメイトがけが リハビリに興味を抱く原点

高橋 国際医療福祉大学はSTとは大変縁の深い大学です。国内初の4年制言語聴覚学科をつくり、日本語聴覚士協会の初代・藤田郁代会長、2代・深浦順一会長は、いずれも本学の教授です。本日は、第3代会長の内山量史先生を迎え、STの創成期から今日までが見えるようなお話ができればと思います。まず、内山先生の経歴から教えていただけますか。

幼少期から野球に打ち込みました。中学時代、足を骨折しリハビリする野球部の同級生をサポートする理学療法士の姿を見て「医療職はいい仕事だな」と思ったことがリハビリテーションの道に進むきっかけです。STという新しいリハの職種ができ、法整備や国家試験の準備が進んでいるという話を聞き、高校卒業後の1987年に、3年制の福井医療技術専門学校（現・福井医科大学）のST養成コースに進学しました。

法士、作業療法士の国家資格があった一方、STはまだなかった時代ですね。

内山 私が進学したころは法整備前ですから、STのカリキュラムもまだ整備されておらず、2年目に失語症、聴覚障害といったスタンダードな専門教育を受け、臨床実習が4回ありました。卒業時点で資格はできず、山梨県内のリハビリテーション病院で、資格がない状態で9年間働きました。

度、必死に勉強し直しました（笑）。1回目は一気に4000人のSTが合格しました。

高橋 21世紀に入って理論が整備された職種と言えますが、20世紀の治療法に標準プロトコル的なものはあったのですか。

内山 いわゆる刺激法、ジェスチャーや非言語的コミュニケーションを使う手法も多少はありました。私が専修学校を卒業し、国家資格化が決まった1990年代初頭から、養成校が一気に増え、同時に教科書も増えました。

撮影＝羽切利夫

できていくときはどのような感じでしたか。

内山 領域は小児と成人領域しかありませんでした。小児の発達系か聴覚障害。成人では脳卒中後の構音障害、失語症。昔のリハビリテーションは温泉地で行う遠隔地リハが主流です。関東地方の患者さんであれば、伊豆、鹿教湯温泉（長野県上田市）、石和温泉（山梨

県笛吹市）などの温泉に浸かってのんびりしましょうという時代です。医師の処方を受けても自宅に帰る期限はありませんから、リハビリ期間は現在と比較すると非常に長いものでした。失語症の方については、1年でも2年でもかかってもいいから、お話ができるようにして役割をもって自宅に帰すようにと、医師からよく言われ

ました。その分、患者さんとのつながりが密になりました。受け持っている患者さんも多いときは30人ほどいましたから、マネージメント力も鍛えられました。

**介護保険スタートを境に  
STの役割も劇的に変化**

高橋 2000年を境に回復期リハビリテーション病棟ができて、

「早く家に帰ろう」という時代になりました。

内山 介護保険がスタートすると、自治体が提供するサービスの半分を負担するので、地域財政が圧迫されます。このため、医療機関で一定期間リハビリを実施してから在宅復帰するようになり、「リハビリテーション前置主義」という言葉が生まれました。

高橋 国家資格化と介護保険制度により、STの処遇や役割が変わっていったということですね。

内山 2006年の疾患別リハビリテーションの標準的算定日数が決められた影響も大きいです。現在、回復期リハビリテーション病棟の在院日数は平均66日、2カ月ほどですから、昔とは全然違います。我々が介入できる期間が本当に短くなりました。



介護保険前は、患者さんが地域に帰っても、当時は言語聴覚士がそれほど多くいませんから、STが各自情報収集し、患者さんが住む地域の互助組織などを紹介しました。摂食嚥下障害の患者さんが食事をとれるようになれば、家族



## 内山 量史

Kazushi Uchiyama  
一般社団法人  
日本語聴覚士協会会長  
うちやま・かずし ●三重県出身。1990年、福井医療技術専門学校（当時）を卒業後、春日居温泉病院（現・春日居総合リハビリテーション病院）に入職し、言語療法部長などを歴任。2005年、日本言語聴覚士協会常任理事、14年から副会長。広報・職能部門を中心に従事し、協会ニュースのカラー化、ホームページのリニューアルなど情報発信の強化や、診療報酬改定など制度対策に尽力した。24年5月から現職。10年から24年まで山梨県言語聴覚士会会長

## 「尊厳ある最期」に携わる仕事

——内山

と外食に出かけるなど、社会への扉が開かれます。そういうことに携われるのがSTの仕事や醍醐味であります。患者さんが2、3カ月で次のステージに移る今のSTはなかなか経験できないでしょう。

**認知機能低下が嚥下に影響も「食介」をめぐる欧米との違い**

高橋 ところで、私は1989年

から、介護の研究を始めました。本学教授でもある大熊由紀子先生が朝日新聞論説委員時代に出版した「寝たきり高齢者がいる国、いない国??真の豊かさへの挑戦」(ぶどう社)を読んで驚いたことがあります。

内山 私も読みました。

高橋 実際、欧州に「本当に寝たきりがいないのか」を何度か確か

行っていました。介護職員の一歩の困り事は、口の中に溜めて飲み込まないことです。認知機能が低下しているためです。

高橋 胃瘻や認知の話になったとき、ST、特に嚥下の専門家は食事についての様子を見えていますか。内山 高次機能障害で次の動作に移れないのであれば、工夫次第で食べていただく方法はあると思います。食べ物が口に溜まっているとき、もう一度スプーンを差し出せば、新しい食べ物が来たと感じ、飲み込んでいただけの体験をしたこともあり。どのような理由で現在の状況になっているかをまず見定める必要があります。

高橋 なかなか食べない人に半ば強制的に食べさせ続ける期間が、欧米に比べて日本がなぜ長いのか、ずっと疑問でした。

内山 2024年度の診療報酬改定でも入院患者の人生の最終段階における意思決定支援をしっかりとすることが盛り込まれました。これからは病院としての方針をきちんと打ち出し、患者さん本人の意思決定を尊重した医療をどう展開

するかが重要です。

高橋 私は、団塊の世代は自らの死を自分でデザインするようになると思っています。子どもたちも親の意思を尊重する方向になるでしょう。最期のあり方が変わり、寝たきり期間は極めて短くなると思います。

内山 団塊の世代は頑固な人も多いですから、自分の人生を人に決めてもらいたくないのでしょう。

**SNSを通じて結婚の連絡も連絡患者、家族とは今もつながり**

高橋 嚥下の専門家としてのSTとしての関わり方もこれから変わってくるのではないのでしょうか。

内山 私は療養病棟にも従事していたことがあり、「食事をしたら肺炎で亡くなってしまおう」という患者さんを数多く見てきました。それでも、本人が最後に「食

## 資格化から25年、STは新領域

——高橋

べたいものを食べたい」、ご家族が「食べたいものを食べさせたい」という意向をお持ちのときがあります。主治医、看護師とも相談し、患者さんの好物だった食べ物や人生の最後にスプーン1杯、食べていただいたことがあります。1、2週間後に亡くされましたが、ご家族から感謝されました。倫理的な問題もありますが、今の若いSTがそういう役割を果たせるかと思うことがあります。

高橋 延命が究極の目的だった時代から、人生の最期のあり方の満足度を重視する方向に変わってきたということですね。内山 どうやって尊厳ある死を迎えていただくかだと思います。そこには食事が関わっていかねばなりません。

高橋 終末期、胃瘻で数年間まっ

## 高橋 泰

Tai Takahashi  
国際医療福祉大学教授  
たかはし・たい ●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了(医学博士)後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長を務めた

た。多くのお酒を飲んでいなかった人がビールを指差したため、ビールを差し出したら飲み始めたそうです。そういう話を聴くと、人間の意欲・食欲は大事だと改めて思います。それでは若いSTへのメッセージをお願いします。内山 私にとつての教科書は患者さんです。これまで33年間に1000人近い患者さんを診させていただきました。今も手紙が届き、お付き合いをしている患者さんも多いです。失語症だった方からSNSを通じて「結婚しました」と連絡が来たこともあります。やはり長く診た患者さん、ご家族とのつながりは今も続いており、私はSTとしてその方たちに育てていただいたという思いです。高橋 STが必要とされる機会が増えており、対象者は子どもから高齢者まで全世代にわたり、ニーズも多様化しています。担い手の育成、働きやすい職場環境づくりに向け、内山先生の卓越したリーダーシップに期待しています。本日は、ありがとうございます。